

このたび メルマガ第1号 2010年の始まりにあたり、吉村順三記念ギャラリー企画ご案内等をお伝えしたいと思います。

JYMGメルマガご登録の皆さまへ、先ずは 第1号を配信いたします。

今年もギャラリーをよろしく願います。

「吉村順三記念ギャラリー」小さな建築展 第19回 は
先週土曜日9日から「 スケッチ 」展を開催しました。

★★★小さな建築展 第19回★★★★★

吉村順三記念ギャラリー 小さな建築展 第19回は

「 スケッチ 」展を

1月9日(土)から2月14日(日)迄の

各土曜日・日曜日 午後1時～6時まで

吉村順三は多くの設計作品の背後に、折々の旅で出会い惹かれた自然風景や建築等のスケッチをたくさん残しています。

その巧みな写生や記録に見る対象の見据え方は、創作に向けた姿勢と深くつながっています。

第19回はそれらのスケッチにいくつかの印象深い吉村語録を添えて展示します。

担当 永橋爲成 藤井章 益子義弘

吉村順三素描展(スケッチ展)案内

吉村は東京の本所緑町の呉服屋の家に生まれ下町で育ちました。父親が旅行好きで、その影響を受けてか、小学生の頃から旅行好きな少年でした。市電に乗って方々へ出かけ、中学へ入ると、土・日とか祭日には必ずどこかへ出かけた青年です。

美術学校に入ってから、時間があると京都に一泊旅行し、信州も好きで、民家の美しさに惹かれよく出かけました。その当時はパスポートの要らない朝鮮、中国にも出かけ、北京の雄大なスケールと美しさに惹かれて、学校を一ヶ月休んで滞在したこともあります。

中国の造形はスケールが大きく、非対称の美や繊細なスケールを重んじる日本とは、文化的風土がまったく違うのだということがわかったとも言います。学生時代のそうした放浪の旅が、建築家として本当に良い経験だったと語っています。

小さいときから絵を描くことが好きな少年でした。中学生時代から、晩年に至る迄に描いた素描が、700余点残っています。

その素描を見ると、吉村が惹かれた対象とどんな見方をして心に刻んで蓄積してきたかが推測されます。作品の一つずつを展示するギャラリーで、この度は、吉村の素描を並べ、日本の伝統と文化、日本人の気持ち、ヒューマンな建築やまちのあり方を求め続けた建築家吉村の視点とおもいを辿ります。

(文責 永橋爲成)

<建築は詩> 建築家・吉村順三のこぼれ話100より

* 日本建築の特色

日本建築の特色には、いろいろあるが、その第一の特色は、流動的な自由な空間をもつということである。その他、伝統建築のすぐれた要素としては、純粹さ、誠実さ、それからくる芸術性、この四つの要素が考えられるし、これらを近代技術の助けによって、ますます自由に発展させていくことによって、日本の建築家としては、ユニークな仕事を世界に示すことができると思う。

『朝日ジャーナル』一九六五年七月十一日号

* 自由な交流

日本の建築では、ご承知のように、建物の内部と外部とは、一体のものとして考えられてきた。ということは、室内と庭との間に自由な交流があることである。季節の移り変りは室内に反映して、そのときどきの気分が生まれ、室内は室内で、自由な使い方によって、おどろくほど効果的なふんいきが生まれる。そこに大らかな気分が生まれ、西洋建築にみるような、堅い建物の中の生活ではなくなるのである。日本の民家が、高く評価されているのもこのことによろう。

『朝日ジャーナル』一九六五年七月十一日号

* 純粹さ

建物の純粹さとは何か。それは建築材料を正直につかかって、構造に必要なものだけで構成するということである。柱は常に屋根をささえる役割をもち、障子の棧は、造形的なパターンであるとともに、しっかりした構造的な役割をもっている。これらの構成は、もっとも簡単で、しかも清楚な美しさを創り出していて、これが私は、純粹さということであると思う。

『朝日ジャーナル』一九六五年七月十一日号

* 誠実さ

建築における誠実さということとは、ちょっとわかりにくいと思うが、これは建物の目的を忠実に解決する、ということだと思ふ。いいかえると、建物の造形を誇張しないことである。外国の宮殿にみるように、重厚で、威圧的であつては、日本の新しい宮殿として正しいあり方ではない。形が複雑で、重々しいものに高い評価があるといったのは、ヨーロッパ的表現であつて、日本には日本の建築的表現があると私は思う。

『朝日ジャーナル』一九六五年七月十一日号

* 日本の気持

日本の気持から出たものをつくるべきでしょうね。つまり簡素でありながら美しい、というものなどを考えてですね。新しいことは、そのなかで考えて行くべきであつて、決して向こうの真似をするとか、西欧の考えでするのではなくて、日本の気持ちでやる、ということが大切ではないかと思ふ。そのためには、日本の気持ちを養うということも大切でしょうね。最近ヨーロッパやアメリカの建築を見に行くことが割合簡単にできるようになっていますが、その前に、自分たちの住んでいる日本の、長年にわたって風土と文化によって培われてきたさまざまな建築から学ぶことが必要なのではないでしょうか。

その上で、欧米の建築からそれぞれの良い影響を受け、新しいオリジナルなものをつくって行くべきだと思つていま

『別冊新建築 日本建築家シリーズ7 吉村順三』

* 伝統的なもの

やはり伝統的なもの、歴史的なものを踏まえなければ、本当のモダンというのではないわけです。欧米の新建築というのは優れていますが、それはクラシックに対抗しているからです。日本ではクラシックは忘れられて、それで、ただ新しいといつても、そんなものは新しいか古いのか、分からないわけです。

『日経アーキテクチュア』一九七六年十一月十五日号

